

第22回  
東京都安全・安心まちづくり協議会総会  
議事録

日 時：令和6年7月3日（水曜日）

午後 2 時 00 分開会

○生活安全担当局長 それでは、皆様、本日はご多忙中ご参加いただきましてありがとうございます。ただいまから第 22 回東京都安全・安心まちづくり協議会総会を開催いたします。私は本日の進行を務めます東京都生活文化スポーツ局生活安全担当局長の竹迫でございます。よろしくお願いいたします。

まず、総会開催にあたり、東京都安全・安心まちづくり協議会の会長であります小池知事からビデオメッセージがございます。どうぞご覧ください。

○小池都知事 皆様、こんにちは。東京都知事の小池百合子でございます。

皆様の安全安心なまちづくりへの多大なるご協力に感謝申し上げます。

皆様の熱心な活動で、これまでの都内の刑法犯認知件数ですが、順調に減少してまいりました。それでも、一昨年から増加に転じているんですね。特殊詐欺の被害は依然として深刻、そして SNS を悪用した投資詐欺や闇バイト、悪質なホストクラブなどの新たな脅威も顕在化してまいりました。都民の不安が高まっています。とりわけ未来の担い手であります子供や若者を守ることは喫緊の課題です。

東京都は困難や悩みを抱えて新宿の歌舞伎町界限に集まる若者たちが犯罪などに巻き込まれないように、「きみまも@歌舞伎町」を 5 月に開設をいたしました。

昨年、キックオフ宣言をいたしました痴漢撲滅に向けた官民連携も、初の大規模調査の結果を踏まえて、取組をバージョンアップしております。

人が活躍する基盤である安全安心を守って高めていく、そしてこれからも東京が世界で一番安全安心な都市であり続けますよう、力を合わせてまいりましょう。

皆様のますますのご活躍を祈念いたしましてご挨拶いたします。ありがとうございました。

○生活安全担当局長 ありがとうございました。

引き続きまして、会長代行であります緒方警視総監からビデオメッセージがございます。どうぞご覧ください。

○緒方警視総監 警視総監の緒方でございます。皆様方には平素から都内の「安全・安心まちづくり」のため、警察業務の各般にわたり、深いご理解と多大なるご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、昨年の都内における刑法犯認知件数は約8万9,000件と、コロナ禍が収束し、街に人の流れが戻ってきたこともあり、前年に比べて増加となりました。

また、犯罪の内容においても、依然多発する特殊詐欺、いわゆる匿名・流動型犯罪グループによる各種犯罪、サイバー空間を舞台に、あるいは手段とした犯罪、ストーカー、DV、児童虐待等の人身安全関連事案など、看過しがたい治安課題が山積しています。

こうした情勢を踏まえ、警視庁では、各部門の緊密な連携の下、組織の総合力を発揮した対策を進めております。

犯罪の取締りを徹底することに加え、ボランティア活動の支援による自主的な防犯活動の促進、街頭防犯カメラの設置を通じた環境整備、登下校時の見守り活動等による子どもの安全確保など、関係機関や住民の方々との連携の下、各種対策に取り組んでおります。

「安全・安心なまちづくり」のためには、官民一体となった継続的な取組が必要不可欠です。

警視庁では、都民・国民の皆様の声に真摯に向き合い、その思いや願いに応えるべく、「治安のプロ」としての力を磨き、「常に都民に寄り添い、都民から信頼される警視庁」であり続けるよう、力を尽くしてまいります。

皆様方におかれては、一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、ご列席の皆様方の益々のご活躍とご健勝を心から祈念申し上げ、私の挨拶といたします。

○生活安全担当局長 ありがとうございます。

それでは、議事に入ります。議事につきましては、事務局から説明をさせていただきます。

○治安対策担当部長 事務局を務めます生活文化スポーツ局治安対策担当部長の勝見です。

それでは、本会の議事でございます令和6年度の活動方針計画案についてご説明いたします。まず資料1をご覧ください。

こちらが本協議会として作成する活動方針及び計画となります。

まず1の背景ですが、活動方針、活動計画の策定にあたり、直近の都内の治安状況等とそれを踏まえた具体的な取組の方向を示すものでございます。

都が実施する都民生活に関する世論調査では、都政の要望に対し特に力を入れてほしい取組として、治安対策が上位に位置しておりまして、特に今年度の1月に公表された令和5年度の調査では、治安対策が最上位となるなど、安全安心に対する期待は非常に高くなっています。

この期待に応え、東京を安心して暮らせる街にするために、これまでにも増して関係者の皆様と力を合わせて取り組んでいくことが必要であり、令和6年度につきましても本協議会の基本方針を策定し、取組を推進してまいりたいと考えております。

次に活動方針ですが、昨年度に引き続き自助、共助の精神による安全安心まちづくりの推進、協議会の総力を発揮した安全安心まちづくりの推進、総合的な安全安心まちづくりの推進の3つを掲げております。

3の活動計画では、活動方針のもと、5つの具体的な活動計画を定めておりますので、それぞれご確認ください。

続きまして、資料2でございます。各団体様からいただきました令和6年度の活動計画を取りまとめております。それぞれ工夫を凝らした具体的な取組を掲げていただいております。

東京の安全安心をさらに確かなものとするため、令和6年度の活動方針、活動計画に基づき取組を進めていただきますようよろしくお願いいたします。

次に、資料3でございますが、こちらは東京都各局及び警視庁の取組です。引き続き着実に取組を進めてまいりますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

続きまして、資料4及び資料5でございますが、令和5年度の各団体様、東京都及び警視庁の活動実績を、また資料6につきましては、都内自治体の取組内容をまとめてございますのでご参照ください。

今後ともそれぞれの取組みに対するご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。

また、参考資料といたしまして、5月31日に開設いたしました歌舞伎町における若者向け総合相談窓口「きみまも@歌舞伎町」の資料も添付してございます。

あわせて参考資料といたしまして、「痴漢撲滅プロジェクトについて」を添付して

ございます。

昨年、この協議会でキックオフ宣言をし、痴漢撲滅に向け官民連携で痴漢は犯罪であるとの強いメッセージを出し、都では被害実態を把握する初の大規模調査や受験シーズンに合わせたキャンペーンなどを実施いたしました。調査結果も踏まえて、今年度より効果的に取組を進めてまいります。

昨年度立ち上げました本プロジェクトの特設サイトには、現在東京都と警視庁の取組、官民連携として民間団体の皆様にもご協力いただき情報を掲載してございます。

引き続き本協議会の皆様にご協力を賜り、サイトを充実していきたいと考えております。本協議会終了後、事務担当者からご依頼を差し上げますのでよろしくお願いいたします。

議事事項、令和6年度活動方針及び活動計画に係る説明につきましては以上でございます。

○生活安全担当局長 ありがとうございます。

それでは、質疑応答に移ります。ここまでの内容につきまして、ご質問、ご意見等がございましたらご発言をお願いいたします。

ご質問、ご意見等がございましたら、私から指名をさせていただきますので、画面下のメニューバーにございます手を上げるボタンを押していただけますよう、よろしくお願いいたします。

特によろしいでしょうか。

ご質問等がございませんようでしたら、ただいまの議事につきましては承認とさせていただきます。議事へのご協力、どうもありがとうございます。

それでは、引き続きまして、次第の5、講演に移りたいと思います。

○事務局 事務局です。土井先生、ご準備はよろしいでしょうか。講演を始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○土井講師 はい、どうぞ。

○事務局 では、よろしくお願いいたします。

土井先生、初めに事務局から先生のご紹介をさせていただきたいと思います。

○治安対策担当部長 それでは、講演に移ります。本日は2名の方にご講演いただき

ます。まず、はじめに、筑波大学教授、土井隆義様にご講演いただきます。

筑波大学教授の土井隆義先生は第 33 期東京都青少年問題協議会で座長を務められ、いわゆるト一横問題に関する答申の取りまとめにご尽力いただきました。

本日は「若者の問題行動の変容、ト一横と居場所を希求する青少年の心情をめぐる現状とその課題について」についてご講演いただきます。

それでは、土井先生、よろしくお願いいたします。

○土井講師 今ご紹介いただきました筑波大学の土井と申します。

予定では 30 分の時間ということでしたが、現在かなり早く進行しておりますので、30 分よりは少し長くお話をさせていただくかもしれません。お付き合いいただければと思います。

それでは、パワポを使ってお話をさせていただきたいと思います。

まず、こちらをご覧くださいと思います。これは刑法犯の推移を示したものです。

折れ線が人口比です。オレンジが成人、青が少年です。現在この成人も減ってはいるのですが、より激しく減っているのはこの少年の刑法犯です。

ところが、その裏では別の事態も生じています。これは児童生徒の自殺者数の推移を示したものです。これは上昇しているわけです。

したがって、例えばこのように 2010 年を起点として見てみますと、非行少年はだんだんと減少しているけれども、自殺者数は上昇しているという、逆の傾向が見受けられるわけです。いわゆる問題行動の現れ方が変わってきているわけです。

こういう言葉があります。「人はその両親よりも時代に似る」という言葉です。

私達は親の遺伝子を持って生まれてきてはおりますが、時代の空気、社会の空気を吸いながら成長していきますから、時代に似る側面が大きいのだということです。

このような時代精神という観点から見た場合に、実はこの問題行動の変容はもう少し早くから始まっていったようです。

こちらをご覧ください。これは校内暴力の事件の数と補導された子供の数です。折れ線が事件の数、棒グラフが補導された子供の数です。

左側、昭和の時代を見てください。事件の数よりも圧倒的に補導された子供の数は

多かったわけです。

これが意味しているのは、当時の校内暴力のほとんどは集団暴力であったということです。したがって、事件1件当たり子供達はごっそり補導されたわけです。なぜか。それは当時の校内暴力の多くは対教師暴力であったからです。

ところが、これがずっと減ってきているわけです。実はそれと相反して増えてきているものがあります。それは学校に行かないという選択をする子供達です。

こうして、このように学校の先生に反抗する、反旗を翻すという子供が減ってくる一方、むしろ学校から足が遠のくという子供達が急激に増えてきました。こうして問題行動の現れ方が大きく変わってきているわけです。

このような変化が急激に生じてきたのは、このオレンジの部分です。では、このオレンジの部分とは一体なんだったのか。これを時代精神という観点から見てみたいと思います。

一番分かりやすいのはこちらだと思います。これは、私達日本の1人当たりのGDPの変化を示したものです。ちょうどオレンジのあたりから、私達は山を登りきって平坦な高原を歩き始めていることが分かります。これは、私達は受け取る実質賃金についても同じことが言えます。

このようにほぼ90年代半ばぐらいから、頭打ち、むしろ今は目減りしているという状況に入っているわけです。

このように、私達は90年代まで山を登っていた。そのあとは山を登りきって、今は平坦な高原を歩き始めているわけです。このような中で子供達の問題行動のありようも、このように変わってきていると考えられるわけです。

では、このような時代精神の変化から、この問題行動の変容を眺めたときに、どういふ観点から考えればよいのでしょうか。

1つは、社会的な活力、あるいは活気の低下という観点から説明できるのかもしれませんが。

もう1つは、人間関係のありようの変化から説明できると思います。

今日は時間も限られておりますので、上側の社会的な活力、活気の面はとりあえず置いておいて、人間関係の面からだけ見てみたいと思います。

お話をする大まかな内容です。

まず、今の人間関係を人間関係の流動化という観点から整理をしてみたいと思います。

次に、その人間関係の流動化の中で今何が生まれているのかということ、内閉化と分断化という観点から整理してみたいと思います。

次に、そういう関係性の中で今どういうメンタリティーが生まれてきているのかということ、これを不安と承認という観点から見てみたいと思います。

最後に、今どういう問題点が考えられるのかということ、この4つの観点で話を進めていきたいと思います。

早速、第1点目の人間関係の流動化から見てみたいと思います。

私達は、山を登っているときにはどこを見ているでしょうか。これから山の頂上を目指しているので、みんな見ているのはこの山の頂上であるはずですが、そうすると、隣を歩いている人がいても、隣の視線は余り気にならないでしょう。みんな見ているのは山の頂上だからです。

ところが、もう今、私達は山を登りきって高原を歩き始めています。そうすると、明確に目指すべき山の頂上は見当たらないので、周りをキョロキョロと見渡すようになります。そうすると、当然ながら周りの人の視線が目に入ってくるようになります。

それだけではないですね。もう明確な山の頂上はないので、自分はどこに向かって歩いていったらよいのだろうかということを考えるときに、では隣を歩いている人は、周りを歩いている人は、どこに向かって歩いて行っているのだろうかということが気になるようになってきます。

こうして周りの視線、周りの重みが昔よりも増してくるんですね。つまり、周りの動向を自分の羅針盤とするようになってくるわけです。

これは個人だけの問題ではありません。社会においても、山登りの時代の人間関係は結構固定的でした。みんな目指しているのは山の頂上でしたから、固定的であったほうがむしろ効率もよかったといえましょう。

したがって、かつて言われた“護送船団方式”というのは、産業界だけの問題ではなく、日々の人間関係においても当てはまっていたわけです。

ところが、今、私達は山を登りきって高原を歩き始めています。そうすると、人によって見ている方向はてんでんばらばらになってきます。したがって、人間関係を組織によって縛られることに対しては、強い不自由感を持つようになってきます。

こうして人間関係においても、規制緩和がだんだんと進んでくるようになりました。人間関係の流動化という現象が進んできたわけです。

それがよくあらわれているデータがあります。これは若者達の友達の人数を調べたものです。

まず、山を登り切った直後、2000年代初頭の友人の数を見てください。大体11人から20人をピークにして、大きな山になっていることが分かります。

その後10年間、高原地帯を歩き始める中でどう変わってきたのか。このように友人の数が変化してきました。簡単に言えば、友達の多い人と友達の少ない人の散らばりの差が激しくなってきたということです。

例えて言うならば、まだ2000年代初頭まではこういう分布を描いていたものが、その後10年間かけてこのように山が崩れてきている。人によって個人差が大きくなってきたということです。

なぜでしょうか。同じような変化を示しているものがあります。これは女性の初婚の年齢を示したものです。緑は80年代、赤が90年代、青が2000年代です。

このように、だんだんと近年に近づくにつれて山が崩れていることが分かります。80年代のピークは24歳でした。いわゆる当時言われていた“結婚年齢適齢期”であったわけです。

これが示しているのは、結婚年齢適齢期という社会的な縛り、枠組みが緩んできた結果、このように人によって結婚する年齢は大きく変わってきているということです。

これと同じことが先ほど示したこの友人関係にも言えるわけです。つまり、組織や制度によって人間関係が縛られなくなってきた分だけ、個人差が大きくなってきた。これが人間関係の流動化という現象です。

それがよくあらわれているのがこちらです。友人や仲間といるときに充実感を覚えるという若い人は、このように上昇してきました。いろいろ理由はあるでしょうが、一つの理由として、今申し上げたように、組織や制度によって人間関係が縛られない、

自由に人間関係をつくれる、それがこのように充実感を押し上げきた大きな要因ではないでしょうか。

当然ながら充実感が上がってくるわけですから、そこに悩みや心配事を感じる人が減ってくるはずです。実際このように充実度が上がるにつれて、そこに悩みや心配事を感じる人は減ってきました。

ところが、減ってきたのは実は 90 年代まででした。そこで一旦底を打ったあと、反転をして、再び増え始めているんですね。充実度は上がり調子のままです。しかし、悩みや心配事は反転をしているのです。

なぜでしょうか。これを第 2 点目、関係のない内閉化と分断化という観点から見てみたいと思います。

このように考えてみたいと思います。人間関係の流動性が増してくると、悩みや心配事の中身が変わってくるでしょう。不本意な関係を強制されなくなりますから、不満感は減ってくるはずですが、しかし、その裏では今度はだんだんと不安感が募っていくことになりはしないでしょうか。

例えば、学校で班活動するとき、教師が一方的に班を決めていれば、子供達にとっては不満です。しかし、「班は皆さんが自由につくっていいですよ」と言われたら、子供達はどうか感じるでしょうか。

不満はないでしょう。しかし、このクラスに自分が入れる班はあるのだろうか。友達は班の一員として私を受け入れてくれるのだろうかという、今度は不安感が募っていることになりはしないでしょうか。

こうして悩みや心配事の中には、不満の要素、不安の要素が両方あります。その合成成分としてあらわれてくるので、このような V 字カーブを描いているのではないのでしょうか。

さて、そういう観点から見てみますと、不満の減少分を不安の上昇分が上回ってしまう。これがまさに 90 年代後半であったわけです。

つまり、日本の社会がずっと山を登ってきて、高原を歩き始めたあたりでした。かつての人間関係に対して抱いていた大きな不満が、高原を歩き始める頃からだんだんと不安へと変わってきたということを示しているわけです。これが人間関係の流動化

という現象であるわけです。

実際、今は遊ぶ内容で一緒に遊ぶ友達を使い分けているという若者が増えてきました。組織や制度によって人間関係が強制されなくなったからです。

象徴的な言葉を紹介してみたいと思います。高2の女子の言葉です。「友達を使い分けています。一緒に勉強する友達、将来の話をする友達、校外活動を共にする友達、局面に応じて最適な友達を選んでいる。嫌な人を切ってしまう。」こうして人間関係の使い分けができやすくなってきました。

しかし、この言葉が示すように、ここには光の面と影の面があることに気がつきません。

局面において最適な友達を選びやすくなってきたのは、不本意な関係を制度によって強制されなくなったからでしょう。しかし、同時に嫌な人は切ってしまうこともできやすくなってきました。それは関係を保証してくれる共通の基盤がなくなったことでもあるからです。

同じクラスメートだから、みんなと仲良くしないといけないという抑圧力は、昔よりも下がりました。でも、その代わり、「同じクラスメートだから、きっと友達だよね」とも言いづらくなってきたのが今の状況です。

そうすると、僕たち、私達が友達であることの根拠はどこにあるのでしょうか。組織や制度が根拠にはないわけですから、あと残ってくるのはお互いの気持ちだけです。お互いに「仲良しだよね」という気持ちだけが、人間関係を支える基盤になってくるわけです。

では、そのために問われるのは何か。最近よく言われるようになりました。「コミュニケーション能力」ですね。確かに新聞の記事を見ますと、この「コミュ力」という言葉が急激に増え始めるのは、2000年代に入ってからです。

お互いに相手の心をモニタリングしないと、うまく人間関係が回ってはいかないという時代に入ってきたからです。

ということは、これは個人個人から見てみると、たしかに人間関係が流動化し自由になったけれども、それは同時に人間関係がリスクを帯びやすくなってきたということでもあるわけです。

さて、日々の人間関係にこうやってリスクを感じていると、なかなか生きづらいですから、当然そのリスクを下げる必要があります。では、どうやってリスクを下げているのでしょうか。

また、象徴的な言葉を紹介してみたいと思います。「友達とは上手に付き合いたい、共感するならシェアするけれども、気が合わないなら付き合わなければいい、だっけんかにはしたくないから。」

けんかをするぐらいだったら、そういう人とは最初から付き合わないでおいたほうがお互いに安心だ、お互いに価値観を共有できる相手とだけ付き合っておいたほうがよい、そういうメンタリティーですね。

ちょっと小さいのですが、こちらも読んでみたいと思います。これは“親ガチャ”についての当時のツイッターへの若者の書き込みです。

「多分高卒と大卒分かり合えない。親の脛をかじって生活をしている人と親の援助を一切借りずに生活をしている人も分かり合えない。親ガチャを失敗した自己肯定感の低い人と、親ガチャを成功した自己肯定感の高い人も分かり合えないので、価値観が違う人とは一定の距離を置いて生活すべし。」

こうして価値観が違う人とはなるべく関わりを持たない、そのほうがお互いに人間関係が安定して平和なのではないだろうか、そういう関係が強まってきているように見受けられます。

実際友達の人数を調べてみますと、確かに 2010 年代までは増えていました。ところが、2010 年から 2020 年にかけては、いわゆる親友、仲のよい友達はほとんど変わってはいませんが、いわゆる知り合い程度の広い友達は急激に減少傾向を示していることが分かります。

こうして人間関係が実は内閉化をしてきているというのが、今の一つの現象であるわけです。もっとも、ただ単純に内閉化しているわけではありません。

これは中学生に対して将来の進路希望を聞いたものです。左側は大学まで進学をしたい、右側は高校までで就職をするというものです。

このグラフが示しているのは、その理由として、「先輩や友達がそうしているから、自分もそう考えるのだ」という子供達の割合です。

緑の色は薄いほうが経済的に恵まれた家庭、濃いほど経済的に厳しい家庭の子供達です。

さて、左側を見てください。「自分は大学まで進学をしたい。なぜなら、友達もそうしているからだ」という子供は、このように経済的に恵まれた家庭のお子さんほど多いことが分かります。

逆に、「自分は高校まででいいんだ。それで就職をするんだ。なぜなら友達もそうしているからだ」と答えた子供達は、このように経済的に厳しい家庭のお子さんほど多いことが分かります。

全く逆の傾向を示しているのはなぜでしょうか。それは、経済的に豊かな家庭の子供達はその子供達同士で、厳しい家庭の子供達はその子供達同士で関係を閉じ、お互いに混ざり合っていないからではないでしょうか。

つまり、ただ単に人間関係が内閉化しているだけでなく、その間に大きな分断線が走っているわけです。

こうして、近年よく言われるようになってきた経済格差というものが、実は関係の格差も今生んでいるわけです。こうして人間関係の分断化という現象も進んできました。

その結果生まれてきているものが、第3点目の論点、関係の不安と承認という問題になってきます。こんなイメージで考えてみたいと思います。

今、大海に浮かぶ孤島に子供達が住んでいます。これがいわゆる「いつメン」と言われるような仲間集団です。自分達と気の合う仲間同士で関係を閉じている。

これは自分たちが自由につくった関係ですから、当然そこでは充実度は上がっています。でも、例えばこの中の黄色い子を見てください。もしもこの関係の中で、自分だけがつまずいてしまったらどうなるのでしょうか。もうこの島には自分の居場所がないということになってしまいます。

誰がこの立ち位置になるか分かりません。なぜなら、みんな同じような価値観の者同士が、似通ったもの同士が集まって住んでいるからです。

したがって、皆誰もが、潜在的に、もしも自分がつまずいてしまったらどうしようという不安感を抱えていることになります。

近年よく言われる“つながり孤独”、友達はあるけれども、孤独感は拭えない、そういう問題は、こういう状況から生まれているのではないのでしょうか。

実際、仲のよい友人はいるけれども、その友人でも自分のことを分かってくれてはいないと感じるといふ若い人が、今は増えていることが分かります。なぜなら、この統計が示すように、親友であっても真剣に話ができるという人は減ってきているからです。

なぜ真剣に話ができないのか。それは、これも統計が示すように、親友とけんかをして仲直りできるとは思いつらくなってきたからです。

価値観が多様化をしてきたために、人間関係も組織や制度によって決まらなくなってきました。その結果、関係が揺らぎやすくなった。すると、けんかをするのはまずいということになります。したがって、今はあっさりして深入りをしないという関係性が広がってきました。これも統計が示すとおりです。

一方、意見が合わなかったときには納得が行くまで話し合いはしない、するとまずいという若者が増えてきました。そんなことをして、もしも人間関係がここで揺らいでしまったらどうしよう。組織によって人間関係が決まっているわけではないのだから、今けんか別れをしてしまったら、もう明日はないかもしれない。

だったら、お互いに意見はぶつけあわないほうがいいではないか。そのほうが人間関係を安泰に続けていくことができるのではないだろうか。

そういうメンタリティーが広まってきているように思われます。

さて、そうしますと、かつて大きな社会問題となっていた少年犯罪、少年の刑法犯は、冒頭にお話をしましたように激減をしていくことになります。

それは、例えば社会に対して、大人に対して不満を抱えなくなったからです。また同時に、きょうの私のこの話からするならば、人間関係に対しても不安を抱えなくなったからです。嫌な人間関係を周りから強制されなくなったからです。

この人間関係に対する不満の減少というものが、この少年刑法犯の減少にも投影されているのではないのでしょうか。その結果、近年では、非行で補導されるのは約 0.2% ぐらいにまで減っているわけです。

では、子供達はこのナイフを捨て去ったのかといえば、そんなことはないわけです。

今、ナイフが向かっているのはこちら側です。人口比で言うと約 10%になりますから、非行で補導された子供の 50 倍の数ということになります。

そういった子供達に、実は自傷行為の経験がある。これは他人を傷つける行為ではないので、なかなか表面には出てきません。しかし、きちんと調査をしてみると、このぐらいの割合の子供達に自傷経験があるわけです。

この背後にあるのは不安の増大という問題ではないでしょうか。この不安を紛らわせようとして、不安を忘れて生きていくために、たとえばリストカットを繰り返す、あるいは不安を紛らわせて生きていくためにこそ、オーバードーズを繰り返すというのが、近年の問題行動の出方になってきているわけです。

実際、近年のオーバードーズの多くは、いわゆる一般の市販薬です。裾野がぐっと広がってきていることが分かります。

当然、自傷行為は生きるためにやっているわけで、なにも死にたくてやっているわけではありません。生きるために、不安を紛らわせるために、自傷行為をしているわけです。

しかし、これが事故死につながることもありますし、あるいは自傷では収まらなくて、それがいわば自殺という問題にも発展をしていくこともあります。

こうして、非行少年は減少しているけれども、10 代の自殺者は増加をしているという、問題行動の大きな変容が見られるようになっているのです。

では、数が減ってきたこの非行少年たちは、相変わらず不満を抱えた人たち、自殺者を目指す少年とは違って不満を抱えた人たちなののでしょうか。

時代精神という観点から見れば、そんなことはないことに気がきます。彼らもまた同じ、この時代の空気を吸って生きているからです。

実は、少年鑑別所に入っている少年達に行った調査を見ますと、自殺を企てたことがあるという子供達は、このぐらいの相当高い割合でいます。さらに自殺念慮になりますと、もっと増えていることが分かります。

さらに自傷行為に至っては、ほぼ男性では半数ぐらい、女性ではもう 70%以上が自傷行為の経験を持っていることが分かります。

実際、例えば少年院に入所した少年を見てみますと、非行自体は減っていますから、

左側の数字がしめすように、少年院の入院者数はぐっと減っています。ところが、それと相反するように、その中で精神障害を有するものはぐっと増えているのです。

その中でも特に急激に増えているのは、一番右側のこの部分です。この「その他の精神障害」というのは、先ほど申し上げたような、例えば薬物を使ったものとか、あるいは発達障害とかといった人間関係に関わるものが起因になっているものが多いことが分かります。

さて、こうやって子供達は大きな不満よりも不安を抱えるようになってきました。例えば、歌舞伎町のトー横のような繁華街に向かう若者達も、このように不満よりは不安を抱えて集まってきているわけです。

当然、今はネットがあります。ネットのコミュニケーションによってつながり合うことはできるはずですが。

では、なぜネットの居場所があるにもかかわらず、実際のリアルな場所を求めてやってくるのでしょうか。

こんな調査があります。対面するときとリモートでつながっているときとで、脳波がどれだけ同期をするのかというものです。実は、対面だと脳活動は同期をしますが、リモートですと、何もしてないときとほぼ同じ状態になります。

つまり、リモートですと情報は伝わるけれど、感情は共有されていないということが分かります。これがこの最後のトピックになります。

今申し上げたように、このネットコミュニケーションにおいては、なかなか感情の共有が難しい。なぜでしょうか。こういうふうには考えてみてはいかがでしょうか。

ジグソーパズルに例えるならば、いろんなピースから私達のパーソナリティはでき上がっていますが、ネットのコミュニケーションというのは、あるピースだけを切り出してきて、それで他者とコミュニケーションをするという形式がほとんどではないでしょうか。

考えてみれば、実はこういうコミュニケーションのあり方は、ネット上ではたしかに極端に表れますが、でもよく考えてみると、これはネットだけの問題ではないことに気づきます。実は、私達は、日々日常においても、特に子供達は、こういう人間関係のつくり方をするようになっていないのでしょうか。

いわゆるキャラをたてあって、友達関係を営んでいくというのが、今日的な人間関係のつくり方だからです。では、キャラとはどういうものでしょうか。例えば、これもまたジクソーパズルに置き換えて考えてみたいと思います。

ここにX軸とY軸を置くとします。このとき、この部分のピースの座標軸はどうなるでしょうか。Xが2、Yが2ですよね。まさにこのポジションを示すもの。それがキャラということになります。

したがって、このときに、周囲ときちっと輪郭が噛み合わないピースは、不安を喚起させるものになります。なので、余りにも個性的過ぎるものは、今の若い人は嫌うのです。それは、人間関係が安定しなくなってしまうからです。

言い換えるならば、個々のピースにおいて大切なのは、この輪郭ですから、ここにあるように、実は絵柄はどうでもいいんですね。大切なのは、きちんと周りとの輪郭がかみ合っているかどうかです。

これがキャラの特徴です。したがって、逆に言うならば、このように外部から全く同じ輪郭のピースがやってくると、それはこの私と入れ替え可能だということにもなります。そのため、キャラが重なってしまうこと、いわゆるキャラ被りもまた子供達は非常に嫌うのです。

さて、そういう観点から見てみるならば、このキャラ的な人間関係において大切なのは、このピースの輪郭だけということになります。絵柄はなくてもいいのです。それは、ほかのピースにも全部当てはまることです。

したがって、キャラというものは実は匿名性を持っているのです。確かに周りの誰とも違う自分を示し、お互いに棲み分けているわけですから、その意味では特殊性はあります。

でも、もし輪郭さえ同じだったら、ピースの形さえ同じだったら、誰とでも入れ替え可能だという意味では、単独性は持ち合わせてはいないのです。

こうして、キャラ的な人間関係においては、他者と入れ替え可能だという、代替可能性からの疎外という問題が生まれてきてしまいます。

さて、こういう人間関係が一般的に広がっていきますと、なかなか自分には自分らしさがあるのだということを思うことが難しくなってくることも分かるでしょう。こ

れも統計が示すとおりです。

自分らしさがあると感じる若者達は、このように減ってくるんですね。一方、その裏側では、なかなか自分らしさを確保できないわけですから、自分はダメな人間だと思うことがあるという若者達が、今度は逆に増えてくることになります。

こうして、人間関係は流動化しているにもかかわらず、いや流動化してきたからこそ、今度は逆にキャラをたてあうことによってお互いに関係を安定させようとし、その結果、硬直した自己像が生まれてきているのです。

それはネットの中だけの現象ではない。リアルな繁華街に居場所を求めてやってくる若者達の中には、このような心性が共通にあるのではないのでしょうか。

では、このように硬直した自己像から脱却するためには何が必要なのでしょうか。

当然、よく言われるような絆といった強い人間関係ではないことが分かります。むしろ、そういった人間関係が強過ぎるからこそ、今のような問題が生まれてきているからです。この関係から外れたら、もう自分の居場所はどこにもないという不安感を抱えているからです。

したがって、今大切なのは、このような絆のような強い人間関係を育むことではなく、そうやって閉じてしまった人間関係の間に、新たに橋を架けていくことであるように思います。

社会学の有名な論文に、「弱いつながりの強さ」という題名のものがあります。

強いつながりは結構閉じがちです。そうすると新しい情報が入ってきません。結果的にそれは弱くなってしまふ。でも、弱いつながりは広く緩やかに開かれていることが多いので、新しい情報も入ってきやすい。結果的に、そのほうが強いのだということ論証しているのがこの論文です。

これを今日の私の話の文脈に置き換えて言うならば、このように緩やかなつながりの中にあつたほうが、狭く凝り固まった自己像に縛られずに、しなやかな自己像をつくっていけるのではないのでしょうか。

それは、周りから、いろんな人たちから、いろんな反応が返ってくる中で、いろんな自分の姿を実感できるからです。

これは、承認という問題についても言えます。キャラをカチッと噛み合わせること

によって得られている承認というものは、実は条件付きの承認にすぎません。でも、多様な関係の中で承認される、それは無条件の承認に近づいていきます。今求められているのはそういうものであるように思うのです。

最後に少しまとめてみたいと思います。

時代精神は大きく変わってきました。山登りの時代の若者達は、大きな不満を抱えていました。人間関係に対しても不満でした。自分の生き方に対しても不満でした。「ああ生きろと、こう生きろ」と、上の世代から押しつけられていたからです。

当時の若者達は、この押しつけられた環境から解放されることを求めています。おそらくこの最後の世代が「尾崎豊を支持した世代」だと思います。

ところが、時代は大きく変わりました。もう今は山を登りきって高原地帯を歩き始めている、そのなかで人間関係も流動化してきた、生き方も昔以上に自由になってきた。その結果、現在の若者達は、不満よりも大きな不安を抱えるようになってきました。

したがって、彼らが求めているのは、この不安を払拭するための承認です。自分の安心できる居場所はどこなのだろうか、自分の進むべき方向は本当にこれでいいのだろうか、それを確認するために周りからの承認が欲しい。それを強く求めるようになってきているわけです。

平たく言えば、山のぼりの時代は、人間関係を強制される不満を強く抱えていた。他方、今日では自分だけが人間関係から外されてしまったらどうしようという不安感を強く抱えるようになってきている。

生き方についても同じことが言えます。かつては、いつも自分は親から見られているかもしれない。近隣からも見られているかもしれない。学校の先生からも監視されているかもしれない。

そういう不満を抱えていたとすれば、今日では、ちゃんと親は自分のことを見られているのだろうか、先生も自分のことをちゃんと見ているのだろうかという不安がむしろ増大をしてきたと言ってもよいでしょう。

もちろん、今でも不満を抱えた子供達がいけないわけではありません。でも、大きな流れとしてみると、だんだんと不満のウエイトが下がり、不安のウエイトが高まって

きているように思います。

そのため今日では、解放という問題よりも承認という問題が強く表に出てきやすくなっているわけです。子供達がネットを使う場合も、世界とつながって、そこに解放感を求めている子供達もいますが、むしろ多くの子供達は、閉じられた人間関係の中で、周りから承認してもらうためにこそ、ネットを駆使しているわけです。

しかし、ネットだけでは不安は解消できない。先ほど申し上げたように、この中ではどうしてもキャラ的な人間関係が純粹化していきますから、そこでは得られないものがある。そういうものを求める子供達が、このト一横のような居場所を求めてやってくる。ここには同じようなメンタリティーを抱えた子供達が大勢いるからです。

だとすれば、こういう問題に直面する中で、私達は、いかに子供達の人間関係を閉じさせることなく、広げていかなせることができるのだろうか。そういう観点からこの問題を考えていかないといけないように思います。

以上で、私のお話を終わりにしたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

○治安対策担当部長 土井先生、ありがとうございました。

ただいまのご講演に関し、ご質問等がございましたらご発言いただきたいと思えます。

ご質問等がございましたら、私から指名させていただきます。メニューバーにあります手を上げるボタンを押していただきますと、挙手の状態となります。

ご質問はいかがでしょうか。

では、お願いします。

○質問者1 土井先生、ありがとうございました。

我々の時代はまさに“尾崎豊”ですが、現在においては、子供達は不満から解放されたということなので、とてもは言い過ぎかもしれませんが、当時よりは良くなったということになるのではないかと。

その一方で不安を感じていると。その不安を解消するために承認を求めているということですが、この承認というのは具体的にどのようなものを求めているのかをお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

○土井講師 ありがとうございます。簡単に言えば、他人から求められたり、他人から肯定されたりということだと思います。

例えば、他人とぶつかり合う中で否定されても、それでも自分という存在自体は否定をされないという経験が必要だと思います。相手とぶつかり合うことを避けていると、この存在自体の承認は得られません。お互いにぶつかりを避けている限りで得られるのは、条件付きの承認にすぎないからです。

でも、相手とぶつかって対立し、場合によってはけんかもするけれども、自分という存在自体を否定されなかったという経験は、無条件の承認感を与えてくれるだろうと思います。

別の身近な例で言えば、例えば、よく最近「自己有用感」という言葉が使われますが、他人から求められた、頼りにされた、他人から必要とされたという経験もそうだと思います。こういう経験が、特に自己肯定感を育てていける承認になっていくのだと思います。

近年は少子化なので、子供達は、どちらかと言うと、いつも自分は見てもらう側なんです。大人からも周りから見てもらう側で、自分が誰かを見てあげる側に立つという経験が昔よりも少なくなっていると思います。

それは、圧倒的に子供の数が少ないからです。ですから、どうしても自分は見てもらう側になってしまう。上の世代から、先生から、親から、見てもらう経験ばかりで、なかなか誰かを見てあげる側に立つという経験が少なくなっている。地域では昔のような子供会も減ってきましたし。

そういう中で、他人を見てあげる側に立つ経験が少なくなっている。他人を見てあげる中で、その他人から求められて、そこで「ありがとう」と言ってもらえるような、そういう経験を持つということ。この承認感、おそらく子供達の自己肯定を育てていくときにとても大きいものだと思うんですね。

ところが、先ほど申し上げたように、同じような似た者どうしの仲間内だけで関係が閉じられていると、お互いに鏡を見合っているだけのようなものなので、相手から見てもらっているという感覚をある程度は持てるけれども、自分が相手を見てあげているという実感は持ちづらくなってしまいうんですね。

したがって、いま大切なのは、たとえば世代を跨いだ人間関係だと思います。もちろん、価値観を異にした人間関係であれば、横の同じ世代の人間関係を広げていくことでもよいでしょうが、また同時に、世代をまたいだ人間関係も、この承認という問題にはとても効果が大きいのかなと思います。

例えば、近年は「子供食堂」なども、子供だけではなくて、そこにいろんな人達が混ざるようになってきました。高齢者の方も混ざって、地域食堂を運営していくという方式も広まってきました。

そうすると、当然そこではお年寄りの皆さんも若い人たちから活力をもらいますが、同時に、子供達もお年寄りからいろんな刺激をもらうわけです。その中で、お年寄りから「ありがとう」と言ってもらったりとか、そういう関係の中で自分の有用感がつくられていくと思うんです。

そういう個々の承認の積み重ねが、この自己の安定感というものを育てていくのではないかなと思っています。

○質問者1 ありがとうございます。

解放に関して、親、社会、先生から解放された一方で、その解放の度合いによって不安を感じてしまうという、この子供の難しさを感じます。

我々はどのように対応していくべきなのか考えなければならないが、難しいなと感じています。

○土井講師 かつてより人間関係も生き方も自由になってきたことはよいことです。しかし、自由であることは同時に不安も抱え込むことになるわけです。

これは子供だけの問題ではなく、私達大人についても同じことです。これまで私達は自由な生き方を求めてきたはずですが、例えば、近隣の付き合いなどもそうですよね。

かつては、隣づきあいはともしんどいものだった。周囲の視線に縛られて、不自由なものでした。いつも周りに目が気になっていた。だからこそ、私達はそこからの解放を求めてきたわけです。自由な人間関係を求めてきたわけです。

その結果、今は、近隣の人間関係をそれほど気にせず自由に生きることができるようになってきました。その代わり、今度は近所の誰からも自分は見られていないかもしれないという孤立感も芽生えるようになってきました。

特にお年寄りはそうですね。昔よりも共同体の拘束力が緩くなった分だけ自由になったけれども、その分だけ孤立もしやすくなってきました。

この自由と孤立、自由と不安というものは、表裏一体の関係性なんですよ。したがって、この問題に私達は常に向かい合っていないといけなくなっています。

その意味で、これは子供だけの問題ではない。お年寄りの問題でもあるし、私達も含めた全世代の問題だろうと思います。近年、孤立・孤独の問題が大きくクローズアップされるようになってきたのも、こういう背景があるからだとは私は思っています。

○質問者1 どうもありがとうございました。

○治安対策担当部長 そのほか、ご質問等はいかがでしょう。

お願いいたします。

○質問者2 土井先生、大変示唆に富んだ話をどうもありがとうございました。

先ほど非常によく分かりやすかったなと思ったのが、不満がなくなれば、不安が増えていくようなスライドがあったんですが、あれは模式図ですが、中身を見ればこの真ん中あたりが、両方が一番低くなるような感じがあるんです。

そうすると、ある程度不満は増えるかも分かんないけれども、もうちょっと締め付けるものを増やしたほうが、不満は増えるけれども不安はちょっと減って、ちょうどいいような、その辺が理想みたいなふうにも見えたんですが、こういうところはもうちょっと締め付けるというか、型を決めたほうが、例えば子供達、若者の不安を減らすことに役立つものというのは、何かあったりするんでしょうか。

○土井講師 ありがとうございます。

いろいろの居場所を用意することはよいことだと思います。でも、縛りをつけるのはむしろ時代に逆行する流れだと思います。

今、私達はこうして自由を手に入れているわけですから、これを逆にまた人間関係を強制されたり、縛られることに対しては、強い不自由感を覚えるはず。それは現実的なことではないと思います。そもそも、お話ししたように歴史の局面は大きく移行しているので、いま縛りをかけると、かつて以上に不自由感は募っていくと思います。あくまでも居場所は用意するが、その居場所に来る、来ないはやはり個人の自由ということにしておかないと、強制ということが入ってくると、それは時代に逆行す

るだけでなく、実質的に機能しないのではないのでしょうか。

むしろ、今日お話を申し上げたのは、皮肉なことに子供達の中ではこの逆行が生じているという事実です。つまり、人間関係は自由になったからこそ、自分たちで人間関係を縛るようになってきているわけです、狭い世界に。これが一面の事実です。だからこそ、そこにしか居場所がないと思込んでいるのです。

そのため、その中で個々の関係から外れてしまったらどうしようという不安感を強く持つようになってきているんですね。実質的には、自分たちの目論見とは異なった機能を果たしてしまっているわけです。そうすると、今このように流動化した社会の中で、どこかにこう縛った人間関係をつくったとしても、でも、そこから外れたらどうしようという不安感は常に抱え込むこととなります。社会自体は流動性が高まっているからです。

ですから、上から関係を縛っていくことには私は反対です。それは、問題の解決にはならないと思います。

多様な居場所を用意することには賛成ですが、そこに足を運ぶかどうかは個人の自由だし、むしろ足を運んでみようかなと思えるような、そういうモチベーションを持てるような環境づくりのほうが、必要なのではないかと思います。

例えば、貧困に対する支援として、用途を限定した援助があります。奨学金が一番の典型例です。でも、これは進学の間意欲はあるけれどもお金がないという子供には有用ですが、進学なんか念頭にない、もう最初からそういう選択を考えもつかない子供に対しては、意味がありません。

そういう子供達は、どうせ進学したって無駄だと考えたり、あるいは進学をしようという考え自体を最初から持たなかったりするわけです。なぜか。それはそういう意欲を喚起させるような機会に接してこなかったからです。

したがって、経済的支援をする場合には、いろんなところで自由に使える金銭的援助を、子供達自らが人間関係を広げていく中でいろんな刺激を受け、「あっちにも行ってみよう」とか「こういう学校にも行ってみようかな」とか、そういう意欲が芽生えてくるような、使い道を限定しない援助が求められているように思います。その意味では支援金を遊びに使ってもらってもいいんです。それが刺激となって意欲を育ん

でいくわけですから。

すみません、ちょっと長くなってしまいましたが、そんなところでよろしいでしょうか。

○質問者2 どうもありがとうございます。

社会に生きていく以上、ある程度の縛りというのは、なかなかゼロにはできない中で、どの程度までが望ましいというか。全く縛らずに、「自由にいていいですよ」というのが、全く縛りのない自由というのも不安だというのは、もう先生おっしゃる通りだと思います。

ですので、社会的な最低のルールというのはどの辺まで求められるのかなということについて、何かご意見をいただければ大変ありがたいなと思います。

○土井講師 その居場所、例えば、「この施設にいないてはいけないのだったら、もう逃げちゃう」という子供達もいるわけですよ。

それは、その施設が子供達にとって、「自分にとってメリットのある居場所だと、ここに居ることが自分にとって安心できる場所なんだ」と今思ってもらえていないからですよ。

したがって、この場所にいることが自分にとってはメリットがあるんだ、あるいは自分にとってはここに居ることが安心なんだと思えるようにしなければならない。簡単に言えば、子供にとって魅力となるような場所にならないといけないと思うんです。

例えば、少年院などには、結構そういう少年たちがいます。「少年院に入ってよかった。そこでちゃんと見てもらって、周りから承認してもらって、自分というものを見つめ見直すことができた。学校にはない経験を少年院の中で得た」と語ってくれる子供達はよくいます。

「自分にとってこの場所があってよかった」という魅力になっているわけですよ。「自分にとってここに居ることに意味があるんだ。ここに居ることにメリットがあるんだ。安心できる場所なんだ」と。いかに子供達にそう思ってもらえるかがポイントなのだろうと思います。

見相でもそうです。些細なことですが、施設の中にいるときはスマホが使えなかつ

たりする。でも、これは不自由な側面だけではないんです。

例えば、友人といつもつながっていないといけない。でもそれは心理的に結構負担だ、そういう子供もいます。ところが施設にいるときは、例えばスマホをオフにしないとけない。そうすると、友達と当然連絡が取れないわけですが、それでかえってほっとしたりする。

「取れないけれども、それは僕が切ったわけじゃない。決まりで連絡できないんだよ。だから、これは僕は悪いわけじゃない。ごめんね」と済ませることができるわけですよ。

そういうメリットを子供達自身を感じるができるかどうかというところが、私はポイントなのかなと思います。

○質問者2 ありがとうございます。

私は少年院を訪問したことがあるんですが、確かに今先生おっしゃったように、子供の反応としては非常によかったというのがあるんですが、一般的な話として、少年院のほうは縛りというのが多いわけですよ。

そういうところのほうは満足度が高いというのは、バランスが難しいなという感じがしているんですが、どこから出ているんですか。

○土井講師 子供達にかけられる人的資源の量が圧倒的に違うんじゃないでしょうか。先ほど言いましたように、少年院に入所する子供達は減っているんですが、その分だけ一人一人にとっても手がかかるようになってきているので、決して楽だというわけではないんですが、昔よりも数が減っている分だけは、1人1人の子供達に圧倒的な資源を投入できるわけですよ。だから、非常に手厚いケアができています。

○質問者2 ありがとうございます。

子供としては、見てもらっているということが大事ということがよく分かりました。

どうもありがとうございました。

○土井講師 どうもありがとうございました。

○治安対策担当部長 土井先生、本日は誠にありがとうございました。

続きまして、警視庁サイバーセキュリティ対策本部対策担当管理官、岩下様にご講演いただきます。

警視庁サイバーセキュリティ対策本部は、サイバーに関する対処能力を向上させるための人材育成、各自治体や民間事業者との連携強化、都民や企業に対する各種セミナーやイベントの開催、SNSを利用した情報発信など、各種対策を推進しています。

本日は、警視庁サイバーセキュリティ対策本部対策担当管理官、岩下様より、「実践的なサイバーセキュリティ対策～なりすまし詐欺等ネット詐欺への対応を含めて～」についてご講演いただきます。

それでは、岩下様、よろしくお願いいたします。

○岩下講師 こんにちは。警視庁サイバーセキュリティ対策本部の岩下と申します。

本日は「実践的なサイバーセキュリティ対策」と題しましてお話をいたします。

インターネット空間はとても便利なものではありますが、中には、自分のスマホやパソコンに不安になるようなメールが着信している方がかなりいると思います。

本日は、そういった不安を払拭するために、中小企業の方向けに、予算をかけずにすぐできるサイバーセキュリティ対策のアドバイスをさせていただければと思います。

次に、まず本日のお話ですが、個人編と企業編と分けてありますが、実際には企業にお勤めの方も個人でもありますので、密接に関係するかと思います。

個人編では、なりすまし詐欺、SNS型投資詐欺、フィッシング詐欺、サポート詐欺といった話をしたあと、企業の方に知っていただきたいことをお話しいたします。

まず、個人編です。偽投資詐欺、SNS型投資詐欺、これはSNSであるXやインスタグラム等を通じて、対面することなく交信を重ねるなどして、投資名目やその利益の出金手数料名目で金銭をだまし取る詐欺、SNS型のロマンス詐欺を除外していますが、これをSNS型投資詐欺と呼んでいます。

その特徴ですが、犯人らは、SNSで著名人の名前や写真を悪用して、投資で儲かる、投資スクールなどと嘘の投稿をしています。よくSNSの広告で勝手に表示される場合もありますが、著名人が出ているから安心してしまいだまされてしまいます。

「この著名人であれば信用できる」「投資で儲けたい」という心理につけ込み、あたかも利益が出ているように信じさせて、投資名目やその利益の手数料名目で金銭等をだまし取るという特徴があります。

その被害の実態ですが、昨年、全国で2,271件、278億円の被害がありました。

今年4月末の時点でそれを超えてしまっていて、被害認知件数が2,500件を超えていて、被害額も334億円。都内も去年に比べまして、既に4月末の段階で被害が今年の1年間の被害を上回ってしまっているという危機的状況にあります。

手口の具体的な例ですが、広告型として、インスタグラムやFacebookなどのSNS上で、投資家等をかたって「稼げる」というような広告を掲載して、被害者の方が、その広告をクリックするとLINEに誘導します。

そこで、トークグループに招待します。そこに指南役とかアシスタントが出てきて、投資に必要な名目でアプリをインストールさせて、口座を指定して入金させるものです。

アプリ上であたかも利益が出ているように見せて追加出資させ、被害者が出金しようとする、「手数料が必要」などと理由をつけて、手数料を入金させて、連絡を絶ってお金をだまし取る。

こういったSNSの広告を起点として行われる手口や、ダイレクトメッセージを使った手口があります。

皆さんがインスタグラム等を使用されている場合、そこにダイレクトメッセージが送られてきます。

そこからLINEに誘導します。カカオトークの場合もあります。メッセージの交換を重ねて親しくなります。「投資で儲けが出ている」といった話が出てきて、アプリの儲かっているスクリーンショットを送りつけてきます。

「必ず儲かる」と言って参加を求めて、入金後は連絡を絶って現金をだまし取る、ダイレクトメッセージを起点とする場合もあります。

実践的な被害の防止方法ですが、有名人の名前や写真が悪用されている場合もありますので、鵜呑みにしないようご注意ください。

勧誘している業者が、金融商品取引業の登録を受けているかを、金融庁のホームページで確認することです。金融庁のホームページにリストとして載っていますので、もし、まさに今お話ししたような手口に心当たりのある方は、ぜひ確認してください。

ダイレクトメッセージやグループチャットで儲け話に注意する。こういった場合も「ちょっとおかしいな」と気付いていただければと思います。

お金の振込み先が個人名の口座の場合は振り込んではいけません。個人名の場合は疑いを高めていただき、なりすまし詐欺に注意してください。

お笑いタレントの髭男爵さんの注意喚起動画を当庁で作成しておりますので、ご覧ください。

#### (動画上映)

映像は警視庁のホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。投資広告には詐欺もあるということをご理解いただければと思います。

続きまして、偽銀行・宅配詐欺、フィッシング詐欺についてです。

これはスマホに詐欺メールが着信するものです。実際の企業をかたってメールを送りつけて、メールの本文に記載のURL、アドレスをクリックさせて、情報を盗み取る手口です。

このフィッシング詐欺と呼ばれているものは、5年前から比べると20倍ぐらい報告件数が増えています。これは、フィッシング対策協議会が集計しているものです。

フィッシング詐欺によるインターネットバンキングによる不正送金事案につきましても、令和5年度は87億円で非常に多くなっています。被害件数は5,500件で、右肩上がりで上がっている状況にあります。

具体的な文面ですが、ユーザーの方が多いところの事業者の名前が使われます。

宅配便であれば佐川急便だったり、日本郵便だったり、ヤマト運輸です。

また、通信事業者もあります。ほとんどの皆さんが携帯をお持ちですから、auやドコモ、ソフトバンクからのものもあります。

官公庁、国税庁をかたって、メールを送ってきます。

記載してあるURLに接続すると、本物にそっくりなページが表示されます。

実際、犯人もこのサイトを作るときは、本物サイトのデータを使いますので、見分けようとしてもなかなかうまくいきません。文字などの配置が古くなったりすれば分かる時はあるかもしれませんが、なかなか見分けがつかないものではありません。

たまに海外で使っているフォント、中国語のフォントが使われていれば、電気の「電」という字が変な「電」になったり、通常日本で使われないフォントが使われるので、「何かおかしいな」と違和感に気づく場合もあります。

スマホですので、特に小さい画面でこれを見分けるというのはなかなか難しいということになります。

そのような条件の下でどのように被害を防いでいくかという点、まず、メール、SMS（ショートメッセージ）に書かれたURL、アドレスにはアクセスしないというのが大原則です。

では、どうすれば良いのか。宅配便のメールが来たならば、宅配便のサイトに自分から接続して確認したり、物を購入したのであれば、購入先のサイトで購入履歴から追跡して、メールからはアクセスはしないということです。

万が一開いてしまった場合でも個人情報を入力しない。アカウントも入力はしないようにしてください。

銀行系のメールが来れば、インストールしてある銀行のアプリからアクセスしてください。通販サイトであれば、通販サイトの公式アプリからアクセスをしてください。

あと重要なのは、このパスワードの使い回しです。例えば、Aという通販サイトでアドレスをIDとして使い、パスワード1234というのを使っているとします。

それでBという通販サイトでも同じものを使っていて、IDとパスワードが流出した時には、同じ組み合わせで使っていることでサービスが不正に利用されてしまうことになります。

実際に個人ユースだけではなくて、会社で使っている業務用のアカウントも、同じアカウントとパスワードの組み合わせで、被害に遭ったという例もあります。パスワードは、使うサービスごとに変える必要があります。

続きまして、偽警告詐欺、サポート詐欺についてです。

相談件数等が増えております。サポート詐欺とは何かといいますと、インターネットで検索しているときに、突然警告画面が出て、それも音つきで煽ってくるものです。

画面に記載された電話番号に電話させて、「その画面を何とかするからお金ください」というようなサポート料を架空請求する詐欺です。

その途中で、遠隔操作ソフトを入れられてしまって、パソコンの中に侵入されるものです。

これは個人でインターネットを見ている分には、自分のパソコンに入っている個人

情報を取られてしまう可能性があるのですが、企業でこの被害にあう場合があり、パソコンの中に多くの個人情報があったという場合には、非常に深刻な問題となりますので、ぜひこの手口を知って、その防止方策についてもご理解いただければと思います。

この偽警告詐欺ですが、お金の要求をするのですが、その手口としてコンビニ等で売っている電子マネーカード、「グーグルプレイカードを1万円分買ってください」等と指示して買ってこさせると、「エラーが出ますので、さらに買ってきてください」と繰り返しまし取り、中には数百万円の被害にあう場合もあります。また、インターネットバンキングの場合もあり、「ログインしてください」と指示して、ログインさせます。

これを遠隔操作で見ている「手数料3,000円になりますので、送金してください」と送金を指示し、送金させる時に桁数を変えて、何百万円の送金に改ざんしてしまうものもあります。

相談窓口に寄せられる相談件数は右肩上がりで上がっていて、被害額は去年とほぼ同数です。

警視庁管内では、昨年、令和5年の被害額は1億7,000万円で、233件でしたが、今年は、4,000万円で107件と、昨年と同水準で被害があります。

これが実際の詐欺画面です。

次から次へと画面が出てきてどのキーを押しても使えなくなってしまう、画面に書いてある電話番号に電話してしまうというものです。

パソコンが動かないと焦ってしまい、電話をかけてしまいます。この電話番号をよく見ると、国際電話番号が使われています。

これは先週に収録した実際に表示されたものですが、こういったものがパソコンに表示されて、家にいれば何もできなくなります。会社で表示されてしまえば、困ってしまって、消せないなので、電話をかけて何とかしようとしてしまいます。

この流れは、先ほど言ったように、警告画面が表示される。画面に表示された電話番号に電話をする。遠隔操作ソフトを言いなりに入れてしまう。犯人によって遠隔操作されて、パソコンからデータを抜き取られてしまいます。

ネットワークで他のパソコンとつながっていると、全部見られてしまいますので、深刻な状況になってしまいます。

そのあと、サポート料として電子マネーカードを取られる。ネットバンキングで5,000円を送金したけれども、実際は500万円も引かれていたというような被害もあります。犯人は桁数を遠隔操作によって変えてしまいます。

操作できない状況ですが、その対策としては、まず今のようなものが出た場合は、パソコンのキーボードの左上にある「Esc」と書いてあるエスケープキーを長押ししてください。3秒以上押しただくと、画面が小さくなって、閉じるボタンを押せるようになりますので、閉じていただくと、画面を消すことができます。

実際にウイルスに感染しているわけではないので、安心いただければと思います。

これは「ポップアップ」といって、インターネットを検索していると、画面に広告が大きく表示されるものと同じで、それが派手に音が鳴っていて焦らせる文言が書いてあると思っていただければと思います。

その他、警告画面の電話番号には電話をしない。「010」ですので、中につなぎっぱなしで1時間ぐらい通話した事例で、通話料が高額の請求になったときもありますので、気をつけていただければと思います。

「電子マネーカードを買ってこい」と言われても、コンビニに行かない。ネットバンキングの操作は行わないでいただければと思います。

エスケープキーはパソコンのキーボードの左上にありますので、長押しして画面を閉じる。

中には、電源ボタンを押して、スリープモードにして、もう一回入れ直したら、また表示されたという場合には、エスケープキーを押せば消すことができますので、安心していただければと思います。

続きまして、企業編になります。サイバー空間における脅威の情勢等々をお話します。

これは、サイバー空間における脅威の情勢全般ではないのですが、実際にどういうことが起こっているかと申しますと、例えると自分の家の窓とか出入りできるところを犯人が、ガチャガチャとドアノブを回して、鍵が開いているかを探している回数を、

グラフで表したものです。

平成 26 年には、176.4 秒ごとに 1 回探しているのに対して、去年には 9.4 秒ごとに探しています。

出入りできそうなところは、軒並み自動的に瞬時に行われています。そういった方法で、ターゲットとする I P アドレスですが、その入り口であるポートで弱いところが狙われている状況です。

このように探索行為がすごく増えている状況をご理解いただければと思います。

その中で、メール攻撃についてお話をさせていただきたいと思います。

メール攻撃は、企業や個人を狙って機密情報を盗るために、企業にメールを送ってデータを盗ろう、もしくはウイルスに感染させようとするような攻撃をいいます。

犯人が、受信者が不信にならないように、取引先とか、マスコミとか、官庁からの資料を装って、メールを送り付けて開封させて、ボタンを押させてウイルスに感染させるといったメール攻撃です。

メール感染を狙うメールの攻撃の例ですが、知り合いになりすまして、表示を偽装したり、題目は当り障りのないものであったり、ウイルス検知ソフトにかからないように圧縮ファイルで送ってきます。

パスワード付き Z I P ファイルの場合は、ウイルス検知ソフトで中を見れませんので、通過してしまいます。

その他、ヘッダーの偽装をしたりします。

実際に、マイクロソフト社のオフィス系のファイルを開くと、「コンテンツの有効化」のボタンが出てきて、これを押させようとします。

これは、マクロを入れていて自動計算するためとても便利なものですが、外部からマクロ付きメールがきた場合には、送ってきた人に電話して確認する必要があります。

これを押した途端に外部のサーバーに通信してウイルスを取り込んでしまいます。一時期感染が広まった、皆さんご存じかもしれませんが、エモテットというマルウェアがまさにこの手口です。

これは、先ほどお話ししました Z I P ファイルの他、word、Excel ファイル等マイクロソフトのオフィス系のファイルが使われます。「！」マークが付いていると、これ

はマクロが入っているので要注意です。あと、OneNote も使われたことがありました。不用意にクリックしないで、ご注意くださいと思います。

続きまして、「ランサムウェア攻撃」です。ランサムウェア、聞かれたことがない方がいるかもしれません。これは、「ランサム」、身代金とソフトウェアを組み合わせた造語です。

データを暗号化して、使用不能にして、それを復旧するには金をよこせといった攻撃です。

中には、データを暗号化して、さらにデータを公開すると脅して身代金を要求する「二重恐喝」と言われるものや、最近では暗号化しないで、データを盗み取って脅迫する「ノーウェアランサム」というのも出現しています。

下の2個のこの図につきましては、実際リークサイト、通常のインターネットで見られないダークWebというところに、このロックビットの3.0というグループが、サイトを設けています。

文字を隠していますが、今表示している企業に対してランサムウェアをかけていて、カウントダウンの部分は、金を払うように要求していて、あと何日で払わないとデータを公開するといった悪質なものです。

ランサムウェアの被害の実態ですが、機器の脆弱性を狙ったものが多いです。会社のネットワークにVPN機器を設置している場合、その機器に脆弱性があつたとします。

通常は正規に外部からやり取りしているのですが、そこの脆弱性を狙って、攻撃者が侵入してデータを暗号化してしまいます。

暗号化といっても被害者からみればデータの破壊です。データを使えない。そうすると事業継続ができなくなるので、非常に深刻な被害となります。

警察庁へのランサムウェア被害の報告件数ですが、ほぼ右肩上がりが増えていきます。

その被害の規模ですが、中小企業が半分といった割合になっています。被害に遭っている業種についても、様々な業種が被害にあっています。

先ほど、最初のグラフでいろんな扉をガチャガチャやっている行為が、業者を狙わずに、入れるところに入ってしまおうというのも、こういった被害の業種の内訳から

も見ることができます。

感染経路ですが、VPN機器からの侵入が一番多いです。先ほど言いました脆弱性を狙ったもので、リモートデスクトップ、テレワークされる方のために開けているもの、その他、メールによるものもあります。

被害にあってしまうと、復旧まで時間がかかり、アンケート回答時にも、まだ復旧してないという事業者の方もいます。

あと、復旧費用の額は、これも100万円未満から、100万円以上500万円未満と、非常にお金がかかっています。

実際にマルウェアに感染してしまいますと、1台のパソコンを確認するのに、業者に委託すると100万円以上かかると言われています。

そこで、ランサムウェアの被害に遭わないため、その会社がマルウェアの被害に遭わないためにどうすればいいかですが、今一度確認していただきたいのが、社内のネットワークの見える化です。

会社のネットワーク資産を全て一覧化して、どここのパソコンは何を使っているというのを把握してもらった上で、バージョンアップしたかとか、サポート期間中等の確認をします。

実際にランサムウェアの被害にあった例では、VPNが、保守業者によって置かれていたものがあります。

気づかない間に、特殊な機械のメンテナンスを外部からサポートをするために、VPNを保守業者が設置していた。そこから入られて会社全体が暗号化されてしまって、事業が立ち行かなくなった例もあります。

見える化のチェックリスト、これは被害例に基づくチェックリストです。

まず、この見える化をするためにネットワーク構成図の作成は、現物を実際見ながらやっていたらと思います。

大袈裟に言うと、光回線を引いていると思いますので、ONUから、これはビルだと全てを追いかけられませんが、配線ボックスからどういうふうに引き込まれているかというのを確認していただく。

外部との接点は物理的に何か所か。要するにネットの回線数です。把握されていな

い企業の方も結構います。メンテナンスの業者が引き込んだものの中にはあったりします。

これは、先ほど言った被害にあったところですが、何本入っているところから見ていただいて、あと知らない機械が接続されていないか。

これは、社員の方が勝手に接続している場合もあるかもしれませんが、正規に特殊な機械を運転するために保守業者が設置している場合もありますので、確実に見える化をする必要があります。

機器の保守業者が設置した機器のVPNはないか。これは、今重複してしまいましたが、確認する。各機器のサポートの期間内かを確認します。サポート外ですと、脆弱性があった場合にファームウェアのアップデートはありません。

そのファームウェアは最新のものかの確認も必要です。

その他、アップデートは誰が行うのか。この部分が、浮いている部分もあります。

Aという機器があって、会社で把握しています。これは保守業者に依頼しているのだからアップデートをしてくれるのだろうと思って、いざ契約書を見てみると、入ってなかった。実際に被害にあって調べてみると対策ができなかったという場合もあります。

従って、メンテナンスを保守業者に委託している場合は、その内容にアップデートが契約に入っているかというのも確認する必要があります。

また、他社のネットワークに接続しているか。これは常時でも部分的でも構わないのですが、東京ではないのですが、よその業者から狙われて、専用のリモートデスクトップの回線から入られたという事例もありますので、ぜひ確認いただければと思います。

注意喚起です。会社のWebでPHPを使っている場合、ぜひバージョンを確認してください。

ここに書いてあるPHPのバージョンが8.1.29、8.2.20、8.3.8未満の場合は、ランサムウェア攻撃にあう可能性が極めて高いです。

この「クリティカル」と出ているのは、10段階のうちの9.8を示してしまして、PHPを使っていてアップデートしてないと、ランサムウェアにかかる恐れがあります。

右のこの画面は実際にWebがこのテキストがHTMLのファイルに書き換えられていても、被害に遭っている状態のものであります。

ここにリードミー、いわゆるランサムノートが置かれていて、開くと「0.1ビットコインをどこどこへ振り込め」という英文が出てきます。そのファイルは暗号化されていて読めません。

こういった被害にあわないためにも、WebでPHPを使っている場合は、バージョン確認を至急お願いいたします。

詳細は、このJVNDB-2024-003292で検索していただくと、参考情報欄に対応の方法が出ておりますので、ご参照いただければと思います。

最後になりますが、サイバー事案に関する通報相談による情報の提供をぜひお願いいたします。提供していただいた情報は情報共有の場で分析した結果をお伝えして、被害拡大の防止と注意喚起に努めてまいります。

また、サイバー事案の捜査にも役立ててまいりますので、サイバー事案に関する通報相談をいただければと思います。

以上、説明を終わります。

○治安対策担当部長 岩下様、最新の状況と対策方法も含めてお話しいただきましてありがとうございました。

ただいまのご講演に関しましてご質問等がございましたら、挙手のサイン、メニューバーの手を上げるボタンを押して、知らせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。では、ご質問のほうがございますようでしたら、これをもちましてご講演のほうを終了ということでさせていただきたいと思っております。

岩下様、改めまして誠にありがとうございました。

それでは、以上をもちまして第22回東京都安全・安心まちづくり協議会総会を閉会とさせていただきます。

皆様、本日はお忙しい中ありがとうございました。

午後3時47分閉会